

# 水産研だより

## 【今回の内容】

- 1 様々な漁法で漁獲されるアユの遡上/人工産の割合とその形態学的特徴
- 2 イタセンパラの試験放流
- 3 カジカ卵の新たな管理方法



増水をきっかけに川を下るアユを獲るやな漁

## 1 様々な漁法で漁獲されるアユの遡上/人工産の割合とその形態学的特徴

平成30年度より、水産庁委託事業として、環境収容力推定手法開発事業を実施しています。

平成30年の8月～10月にかけて、長良川上流域の様々な漁法で漁獲されるアユについて、海域から遡上（以下、遡上）したものと、人工産放流魚の割合を調べ、それらの形態学的特徴も調査しました。

平成30年の8月にはすべての漁法の平均で、遡上が約80%と多く、9月以降は徐々に人工産の割合が増加しました。8月の友釣り、たくり、網で漁獲されたアユの遡上/人工産の割合には有意な差異は認められませんでした。一方で、“やな”で漁獲されたアユのうち約60%が遡上であり、他の漁法と比較して有意に人工産の割合が高い傾向がありました。

また、なわばりを持つアユは、背びれの後端が伸長することが知られていますが、8月に“やな”で漁獲されるアユのうち、遡上魚は人工産放流魚よりも有意に背びれが伸長していることがわかりました。一方で、友釣りや網で漁獲されるアユは、背びれの長さには差異は認められませんでした。これらのことから、漁獲方法によって、アユの由来やその形態的特徴が異なっていることが明らかになりました。



背びれが伸長していない個体



背びれが伸長した個体

## 2 イタセンパラの試験放流

イタセンパラは、国の天然記念物（文化財保護法）および国内希少野生動植物（種の保存法）に指定されているコイ科の淡水魚で、岐阜県では木曾川水系でのみ生息が確認されています。当研究所は、国交省および環境省が事務局を務める木曾川水系イタセンパラ保護協議会に参画し、生息域外保全（飼育・繁殖技術の確立）や地域啓発・環境教育に取り組んできました。

これらの活動の一環として、平成30年10月3日に当研究所を含む4機関で飼育・繁殖させたイタセンパラ80尾を木曾川水系で初めて試験放流しました。今後、放流効果の検証を行うとともに、各関係機関と連携して放流体制の確立に取り組んでまいります。



(生態環境部 荻谷)

## 3 カジカ卵の新たな管理方法

現在、カジカ養殖では自然産卵によって得られた受精卵を卵管理水槽を用いて発眼期まで収容します。そして、発眼後に検卵（死卵の除去作業）を行ったのちに、ふ化用水槽へ移動させています。カジカ卵は小さいため、この作業は非常に骨が折れます。そこで今回、アユやワカサギの受精卵で行われている円筒型ふ化槽による卵管理方法を検討しました。

この卵管理方法では、人工授精によって得られた受精卵の粘着性を陶土を用いて除去したのちに、卵を収容します。このふ化槽は下部から水が入り、卵の間を通過して上部から排出される構造になっています。このふ化槽の中では比重が小さい死卵は上層に浮くため、サイフォンで上層の死卵を除去することで、下層の正常な卵だけを得ることができるため、管理の簡略化および労力の軽減につながります。

実験の結果、カジカ卵のふ化率は良好であり、卵管理の省力化もできました。今後は、小規模施設での普及を見据えて、円筒型ふ化槽の小型化も行う予定です。

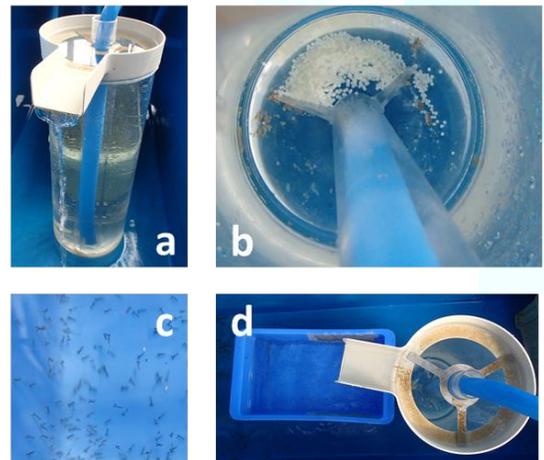


図 (a)円筒型ふ化槽、(b)陶土処理を施したカジカ卵、(c)回収かごに集まったカジカふ化仔魚、(d)ふ化槽および回収かごの全体像

(下呂支所 下村)